

木本雅康 著

『日本古代の駅路と伝路』

同成社 2018年6月 264頁 6,000円＋税

本書は、歴史地理学の立場から日本古代の地方道路について考察したものである。駅路や伝路など、古代日本の官道とそれに関連した官衙や条里制といった地域計画の復原を、歴史地理学の立場から研究し続けた著者は、2018年1月に逝去された。歴史地理学的手法をもって古代道路研究を行う第一人者として、精力的に活動され、今後ますますの活躍が期待されていただけに、学界の受けた衝撃と損失は計り知れない。

著者は前著『古代官道の歴史地理』(2011年)の出版先である同成社古代史選書編集員による推薦を受けて、前著執筆以後に公表された論文をもとに著書を準備していた。それらの遺稿を鈴木靖民氏と中村太一氏が編集協力して完成したのが本書である。書名がまだ決まっていなかったため、はしがきの原稿や、原稿がまとめられていたファイル名などから、書名が決定された。それらの経緯などが本書内の中村太一「木本雅康さんとその学問」(253-264頁)に記されている。

本書の目次は次のようになっている。

はしがき

第一章 古代の地方道路

第二章 古代常陸国の駅路と内陸水運

第三章 その後の東山道武蔵路

第四章 因幡国気多郡の古代官道

第五章 島根県出雲市で発掘された推定山陰道駅路の意義

第六章 播磨国明石・賀古・印南三郡の古代伝路

第七章 西海道の古代官道

第八章 筑前国穂波・嘉麻両郡の古代官道

第九章 肥前国基肄・養父両郡の古代官道

第一〇章 肥前国彼杵郡の古代駅路

あとがきにかえて一本書の意義と今後の展望—
木本雅康さんとその学問(中村太一)

第一章「古代の地方道路」は、公権力によって作られた官道について、測量や敷設の目標物、道路の構造、さらに地域計画との関連を概説したものである。現地調査の成果に加え、考古学や文献

史学の成果を組み入れて、官道研究全体を見通している点が、著者の業績の特徴となる。

また史料に残らない測量法について、目標物の設定や直線を引く具体的な方法も考察された。古代官道は、平野部では直線的に敷設され、向きを変える場合は基本的にカーブを描かず、「折れ」を作って進んだとされる。川などの地形を無視した敷設は、駅路のルートが早く廃絶する要因となったと指摘されている。

続いて官道の構造について、幅員や側溝、波板状凹凸面といった形状の概説に加えて、切り通し状道路遺構や築堤上道路など直線を志向するゆへの痕跡について説明した。さらに視野を広げて、地域計画と道路との関わりについても整理した。国府との関係でいえば、古代駅路は7世紀第3-4半期にあたる天智朝に敷設されたという見解を示す。一方、郡家と駅路との関係は多様であり、両者が離れている場合には、連絡路として伝路でつなぐ例もあり、他に駅路へのアクセスが容易な位置に郡家が移転する例も紹介される。山城と駅路は同時期に設置されたと考えられており、山城間をつなぎ地名として残る「車路」は駅路の起源との考えを示している。

第二章以降は、古代官道についての事例研究となる。第二章「古代常陸国の駅路と内陸水運」では、駅家のほとんどが河川の渡河点に想定されている常陸国の東海道本道に注目した。緊急通信の機能を本来とした陸上の駅路にとって、河川は基本的に障害であったという考えを支持しつつ、常陸国の場合は、その立地的特徴から水陸両方に対する機能をもった駅家が存在したことを指摘する。

常陸国は、陸奥国への輸送ルートとして重要であり、蝦夷征討の際に大量の物資が運ばれたことが記録されている。難所の鹿島灘を避けるため、利根川と陸路利用を間に挟み、再度河川を利用して海路に戻るといった状況があった。その陸路と漕路の接点に駅家が想定されている。さらに付近から検出される倉庫群については、郡の正倉が駅に併置されたと解釈している。

第三章「その後の東山道武蔵路」では、埼玉県東部の台地上にルート復原がなされる東山道武蔵路が、宝亀2(771)年に廃止された以降の状況について考察された。川越市の八幡前・若宮遺跡

は、入間川の渡河点付近に位置し、「駅長」と書かれた墨書土器が出土した。武蔵路廃止後と思われる遺構や遺物も出土しており、なかには酒の醸造を示す帳簿木簡も含まれていた。これについて、駅路としては廃絶しても、郡家と郡家を結ぶ伝路としては機能し続けたとの見解を示す。

廃止後の東山道武蔵路は、場所によっては主要な交通機能をやや蛇行する平野部の鎌倉街道に譲った部分もあった。しかし水が得にくい台地では、武蔵路のルートはほぼ完全に後世の堀兼道に踏襲され使用された。その理由として、武蔵路開通時に掘られた井戸の利用を挙げている。

第四章「因幡国気多郡の古代官道」は、一郡内に複数の官衙遺跡が存在する因幡国気多郡の官道についての復原研究である。まず敷見駅と柏尾駅の位置比定を行った。いずれも地形や駅路の復原ルートとの関係を基本としつつ、敷見駅は周辺の古代寺院の存在を考慮し、柏尾駅は馬次から転化するという足利健亮の指摘¹⁾もある松ノ木地名や郡家遺跡の存在などから、駅家の位置を想定した。

また伯耆国笏賀駅が比定されている石脇第3遺跡森末地区調査に触れ、各駅間の駅路を考察した。なるべく最短距離で山越えをするルートを復原し、これまで駅路とみなされていたルートは伝路であった可能性を示した。ただし郡家がそれまでの勢力の本拠地と異なる所に置かれた「非本拠地型郡衙遺跡」²⁾の場合、伝路の成立と郡家との関係をどうとらえるかは今後の課題とされている。

第五章「島根県出雲市で発掘された推定山陰道駅路の意義」では、道路状遺構が検出された杉沢遺跡、三井Ⅱ遺跡、長原遺跡に言及し、筑紫街道と呼ばれる古道が駅路を踏襲していたと述べた。また近世の村絵図に、この駅路ルートが直線的に描かれていることを紹介した。さらに杉沢遺跡で検出された道路状遺構は、秦直道と共通する工法を有していたことを指摘している。一方、これらの道路状遺構から推定される駅路ルートをとる場合、出雲郡家との関係では説明できないとし、今後の検討の必要性を記している。

第六章「播磨国明石・賀古・印南三郡の古代伝路」は、古代駅路の復原研究がさかんに行われたものの、伝路の研究は存在しなかった播磨国

明石・賀古・印南三郡を取り上げた。まずこの地域の駅路と駅家を概観し、各郡家の比定地についても検討した。「郡」と記された墨書土器の他、式内社や群集墳、郡寺と呼ばれる郡家から2km以内に位置することが多い寺院の存在も考慮して比定する。その上で伝路を復原した。

駅路と並行したり、合流したりしながら大化前代の中心地を結んだ伝路は、直線的な駅路が成立する以前の「原初山陽道」であった。同時期に駅路のバイパスとして使われた可能性もある。伝路のルート沿いには、駅路と同じく大道の地名を伴う候補地も多く、直線的な形跡が残る箇所もあるため、実態の解明のために今後発掘調査が進められることが期待されている。

第七章以降は、九州の古代道路に関する研究となる。第七章「西海道の古代官道」では、大宰府から九州各地にのびていた6本の道路の復原を通して、西海道の交通体系を考察した。6本の駅路を終点の駅名をもって名づけ、それぞれの特徴を整理した。西海道の各駅家の比定は、山陽道と同様に瓦葺駅館であったことが想定されるようになり、近年進んできている。対外的な緊張に直接さらされる地域であることから、敷設時期については、白村江の戦後の対外危機に備えて建設された山城を結ぶ「車路」との関連³⁾を支持する。

西海道では条里余剩帯の検出例も増加しており、条里地割形成と道路との関係も今後注意が必要である。さらに古代官道の遺構を地域でどのように活用していくのかといった取り組みの事例が紹介された。

第八章「筑前国穂波・嘉麻両郡の古代官道」はいわゆる「豊前路」の復原研究である。大宰府までの官人の赴任などに際しては、山陽道を経由し「大宰府路」が利用されたが、大宰府路よりも距離が短い豊前路も利用されていたことがわかっている。本章では伏見駅と網別駅の位置を比定し、駅路のルートを復原した。郡家の位置や伝路のルートについても、発掘調査結果に加えて史料、伝承からも推定している。また大宰府路沿いに烽が設置されていたと考えられることから、豊前路に関しても検討し、「軍防令」に記された40里毎の烽候補地を推定した。

第九章「肥前国基肄・養父両郡の古代官道」では、律令国家にとって最重要地域の一つであった

筑紫平野について、駅路、伝路やその他の直線道を面的に考察した。この地域は筑前国、筑後国、肥前国の境に位置し、直線の国境の存在が以前より知られてきた。大宰府や筑後国府、各郡家が比定され、肥前路や大隅路も通過する要地である。

この地域にはりめぐらされていた様々な官道について、遺跡や旧版地形図、空中写真、地名を駆使して駅や道路網の復原を行った。そのなかには、『延喜式』に見えない広い直線道「筑紫横道」⁴⁾や、前伏遺跡や北大手木遺跡から出土した道路状遺構も含まれている。

第一〇章「肥前国彼杵郡の古代駅路」では、駅が一つと記された『延喜式』当時の駅路と、二つ認められる『風土記』当時の駅路について、それぞれ経路を検討した。加えて『風土記』に三か所設置されたと書かれる烽について、地域全体のネットワークを考慮して現地調査を行うべきと研究の方向性を示唆している。

以上、本書を紹介してきたが、それぞれの章が古代官道を研究する際の参考となるものである。復原に際して用いる資料や方法論や考え方など、限られた条件の中でいかに古代の地域にせまっていくなかを示してくれている。地図や空中写真を用いて分析し、現地調査を繰り返し、発掘資料や文書、絵図などの史料を結び付けていく著者の手

法は、基本的でありながら、それを蓄積する努力と忍耐を必要とする。さらに発掘調査で新たな情報が得られると、丁寧に自論を見直し、研究成果を更新する研究姿勢が貫かれていることも忘れてはならない。

評者が院生の頃から現場に誘っていただき、たくさんのことを教えてくださった著者のご冥福を心からお祈りするとともに、今後の研究の進展を見守り、叱咤激励していただきたいと望んでいる。古代の歴史地理学に課せられた課題は、本書「あとがき」にかえて一本書の意義と今後の展望」のなかで中村氏が述べている。本書を送り出してくださった鈴木氏と中村氏にも感謝申し上げたい。

(山近久美子)

〔注〕

- 1) 足利健亮『日本古代地理研究』大明堂、1985。
- 2) 山中敏史『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房、1994。
- 3) 木下良「近年における古代道研究の成果と課題」人文地理40-4、1988、40-58頁。
- 4) 片岡宏二「小郡官衙遺跡(福岡県小郡市)の再検討」条里制・古代都市研究23、2007、24-48頁。